

南方（ビルマ）

灼熱の地 南方転戦記

宮城県 三浦 一夫

昭和十六（一九四一）年十一月十日、徵用令により横須賀海軍建築部に入所し、同時に南方派遣のため十一月十八日、横須賀港を出港した。乗船した貨物船は総重量三七〇〇トンといわれ、積荷はパネル型枠、日産トラック、いすゞトラック等を満載した間に私共三百人の工員が、乗船した。出港する時は一隻とと思っていたが夕暮れと共に船が集まり、翌朝には貨物船十六隻の船団となった。加えて海軍の駆逐艦の護衛、さらに空から護

衛機に付き添われていたので安心しながらの航海でした。

一週間後の十一月二十五日、フィリピンのマニラ港に到着しましたが上陸はせず、船上より眺めた陸地の方では戦闘が行われていた模様で、方々から黒煙などの上がるのが見られました。

マニラ港では二、三日の停泊で出港の命令が出て、何事もなく出港しました。途中、昼は甲板に出て島々の風景を珍しく眺めるといふ、戦地なのに物見遊山の気分を満喫。空襲もなく十一月三十日、セレベス島のマカッサルに上陸しました。

同島は、戦場でもあった形跡もなく、住民も多く、店舗もあり、また品物は沢山あり平和そのものでした。私共は同地において海軍衛生隊に編入

され、応急手当など衛生兵としての教育を受け野戦病院の勤務に当たりました。夜は当直、昼は看護に働き、毎日のように死亡する人、苦しむ人、発熱する者などで大変でした。

昭和十七年五月十日、セレベス島を出港、十七日、チモール島クーパーンに上陸しました。同島では英国軍の爆撃機が飛来する度に日本の飛行機も飛び立ち、空中戦となり、私共はその度に隠れ場を見つけ、遠くから見守るのみでした。毎日がこの繰り返しで、友軍機が飛び立っているうちに、黒煙を吐いて落下する飛行機は友軍機か敵機なのか分からずにおりました。

そのうち空襲が激しいため同島を引き揚げることになり、出発準備に忙殺されました。五月二十日の早朝、乗船しましたが、出港命令が出ないのて昼頃まで船内におりますと甲板より「空襲！」の声が聞こえて来ました。陸地の方を見ますと空中戦が展開されており、地上からは高射砲の砲撃

でした。

そのうち一機が、私共の船を目当てに低空飛行で煙を吐きながら爆弾を二、三発落とす、水面すれすれに沖の小高い草原に不時着した、との後日の話でした。このため出港予定であった船は船首の錨を上下するウィンチを爆破されて航行不能となり全員下船となりました。

この爆撃で工員数十人が死亡、負傷者も大分出ましたが、私は無事で、材料不足で充分の衛生処理はできかねましたが、有るだけの材料を利用して数十人位に応急手当を済ませました。

上陸後は海軍の医科野戦治療室において工員の負傷者の手当を済ませ、六月二十二日朝乗船となり、同二十四日アンポイナ島に上陸、同日同島のラハ飛行場勤務となりました。ここでの幕舎作り作業には、先に運搬された「パネル」を壁、窓、屋根、等を利用して組み立て作業を進めました。当地は空襲とてありませんがいつ飛来しても対応

できる体制にと、航空隊の兵隊が一個小隊配備されてきたと思います。私共工具は飛行場の道路工事やその他の作業を分担させられましたが、暑さのために熱射病の患者が多く出て、作業も計画通り進まなかったのです。

七月十日、患者輸送のため内地帰還となり、同日アンボイナ島出港、乗船した船は、当時の欧州航路に就航していた「鎌倉丸」でした。私共衛生隊の二人は二等客船室が指定され、患者は三等客船室でした。船はビルのような大ききでプールも娯楽室もあり、プールでは全員消毒のための入湯に使用させられ上陸準備をしたのです。

七月二十日、横須賀港に到着、直ちに上陸。同時に横須賀鎮守府勤務となり、同工具宿舎に泊まり、海軍医務室勤務となりました。そうこうしているうちに八月十五日、徴兵検査のため帰郷することになりました。八月二十日、徴兵検査の結果「甲種合格」となり入隊まで期間があったので、再び医務課に勤務しました。医務課内には軍医四

人、一等兵曹一人、上等水兵二人、看護婦長一人に看護婦ほか、それに私共二人でした。病室はななく、診療治療のみでした。そうしているうちに各方面の作業現場にそれぞれ配属されることとなり、私は神奈川県の大楠釜利谷工員宿舎勤務を命ぜられ、十二月二十日横鎮に帰り、入隊までの期間勤務しました。

昭和十八年四月五日、現役兵として入隊するため、徴用解除となりました。昭和十八年四月十日、現役兵として仙台第四連隊補充隊に入隊しました。

入営時の家族構成

父	健在	農業
母	〃	〃
本人	〃	出稼ぎ
妹	〃	農業手伝い
妹	〃	〃

私は三人兄妹の長兄でしたが、田畑が少ないの

で出稼ぎしなければ経営が成り立たない状態でした。それで妹達と、それに近所に叔父がおりましたので後事を依頼し、安心して入隊ができました。十日朝早く近くの駅まで親戚の方々や部落の人々に見送られ、一緒に同隊に入隊する友五人と同駅で落ち会い乗車しました。

入隊時間は午後一時でしたが仙台駅には十時頃に着きましたので仙台にある親戚に挨拶廻りをし、正午に営門前に集合しました。そこで人員点呼を受け入営しました。付添い人は面会室で待合せ、私共は兵舎前の広場に集合しました。各方面からの入隊者概ね三百人位ではなかったかと思いません。

最初に師団長の挨拶があった後、陸軍二等兵の階級章を貰って付けた時、ずっしりと軍人精神の重みが肩に伝え、同時に強い覚悟が体に充実し、これから号令で一挙手一投足、動かなければと痛感いたしました。

中隊編成の通達があり、私は第二中隊の第二機

関銃中隊第四班に指名され、各班の班長に引率されて早速二階の班内に案内されました。ここで軍衣袴を支給され、早速着替え、面会室の付添人に私物を渡し、長話しもできず、後を振り返りながら班内に帰りました。

班には上等兵や一等兵の方々が、新兵が入って来たとはばかりに肩を怒らしているように見えました。同時に私共は寝台の前に案内されました。

頭上には整頓棚があり自分の持ち物をキッチリ乱さずに、との説明があった後、今日と明日はお客様だとの事でした。次の日から教育班長殿に引率され、連隊本部の食堂、入浴場、馬舎等を案内説明され、一日を終えました。そして明日からの各当番の割当てが生まれ、炊事当番、馬舎当番、下士官室当番との組み合わせを各一週交代で務める事でした。

初年兵の教育は朝九時より、近くの練兵場にて教官、教育係上等兵二人で行われました。私共は

重機関銃中隊なので、常に四人と八人一組みです。連日の教育で中隊に帰れば割当て当番の実施、特に馬舎当番は大変苦勞でした。朝起床と同時馬舎に行き馬の手入れ、水飲ませ、床藁交換、馬糞の片付けなどで、これを終えようと中隊で朝の点呼です。

馬舎より二百メートル位を早駆けで、点呼に間に合ったと思ったら服装検査、最後に軍靴の点検です。馬舎の作業後なので靴底に馬糞の付着しているのが見付かり、その軍靴を首に吊り下げ、各班を廻って申告してこいと命令で、三個班を廻って報告することもありました。

食事当番は飯を盛り付けをする。下士官、班長、古年兵の順に盛り付けてゆくと初年兵の分が少なくなり、朝から腹ペコです。そして食事後はすぐ初年兵集合の命令が来るなど、これが毎日の繰り返しでした。初年兵教育の教官は見習士官の少尉、教育係班長、助手の上等兵の引率で、練兵場まで歩いて十五分位で到着します。

初めての本格的な教育に入ると自己紹介を済ませ、いよいよ本番の基本動作から始められました。私共は特に南方派遣補充隊要員としての入隊のためか、教育には余り念が入らなかったように感じられました。

一カ月も過ぎ教育も厳しさを通り越して楽になりました。機関銃隊では馬を二十頭も飼育しており、時々駄馬運動に出動するようになりました。その時は教育隊長を先頭に教育班長が最後尾となり市内を通った高台の原野で駄載教育も実施されました。

そうしているうちに南方に近々出発することになり、一泊二日の日程で外泊を命ぜられました。別れて間もない郷里に帰ったのですが家族とは久しぶりに会ったような感じでした。近所には顔を出す暇もなく翌日、午後故郷の駅では、第一線に行く覚悟と再び逢うことのできないであろう見送りに来てくれた妹達に、両親を頼むぞと心で願ひ、戦地で頑張つて来ると誓つたことでした。

た。その時同年兵も同様でした。みんなで一一緒に仙台に向け出発しました。

九月十日は第二師団第四連隊の軍旗祭と云う、大変意義深い日に南方派遣補充隊の出発だと思われました。同日仙台駅より汽車に乗ると同時に窓は全部閉め暗闇にされました。これも戦時中なので仕方ないこと、どこを走っているやらも分からず、着いた所は広島県の宇品港近くの旅館の前でした。同旅館にて出発準備を整える。そのうちに南方よりきた初年兵受領の兵隊に引率されて乗船、九月十五日出港しました。

夕方、瀬戸内海を眺めながら、これが我々の祖国の見納めかと感傷的な目で内海を眺めているうちに誰かから「ここは下関だ」と聞かされましたが外は真っ暗闇でした。その後何時間走ったか分からぬが敵の潜水艦が現れたとのことで、その時より監視に当番制で配属され務めました。乗船は貨物船で何が積んであるのか天幕で囲われて

おり、その間に兵隊です。三百人位乗っていると思われました。以後十日間も揺られ、船酔いする者が続出、元気で食事をとる者が少なくなりました。台風シーズンだったと思われます。

貨物船は大きく揺れ、異物を吐く者があり、それでも我慢しながらの航海で、九月二十五日、高雄港に到着しました。上陸して高雄神社に参拝しました。参道の両側には日本人の会社などの献灯した石灯籠が一メートル間隔に並び、祖国の人の厚い信仰心に心を打たれ参拝を済ませました。

再び乗船して九月二十七日、高雄港を出港しました。ここからは既に敵の海域ですので空と海との監視は大変でした。そのうちどこからともなく貨物船のような船が集まり、数十隻の船団を組み、快速艇が船団の間を走り廻り、空からは飛行機が警戒に当たってくれました。進行中は敵も少なかったのか進路を妨げられるものもなく、島が遠くに見え、近付いた所がマニラ港でした。十月三日、マニラ港に到着。仙台を出発以来約一カ月

を要しました。

上陸はせず、同港では我々の本隊が別船に待機しており、我々の船内に本隊の隊長が見えられ、部隊編成となりました。そして勇一三〇一部隊第二機関銃中隊佐藤周隊に編入され、船内で佐藤隊長の学科試験が行われ、首尾よく通過しました。同隊は元ニューギニア島のガ島帰りの部隊で、その頃は苦勞してマニラに着いたそうです。そこへ私ら初年兵が補充になったので、力強く感じられた事と思います。船内で班編成された時に、私の近所から出征された陸軍軍曹の太田さんが私の班長さんになりました。数年ぶりで会った太田さんと奇遇に喜び合い、お互いに家族の事など話し合いましたが、私の班長さんとして迎えられたことは本当に運が良かったと思います。

十月六日マニラ港を出港、十月十日、船内で一等兵に進級、十月十七日、ジャカルタ港に着きました。さらに十月十九日、ここからは陸路出発、同日スラバヤ着、八甲兵舎に入り、ここで第二期

の検閲を受ける事となりました。

朝、起床はラッパで起き、内地とは天地の差で点呼、体操、食事後には初年兵は広場に集合の号令で集まり、古年兵の指導教育を受けるのですが、戦地の故か教育も厳しくありません。ただ赤道直下なので暑さが厳しく、十月の半ばの乾期なのでスコールが少なく温度が高いので気候に慣れない初年兵は熱病に罹ります。日中は二時頃まで演習もできずに昼休み、夜は暑苦しく、蚊も多く苦しい毎日でした。

初年兵はこの風土に馴染まないからと、熱病の薬を毎日三食後服用のこととなりました。また日中は暑いので、起床と同時に演習の時もあり、連日の暑さに悩まされつつも演習に励みました。そして班内に帰れば当番があり、舎内作業は厳しくありませんが暑さに耐えかねる状態でした。私も我慢しましたがついに熱病に冒され、教育期間中とは頑張ったのですが、スラバヤ陸軍病院へ入院となりました。

数日位で退院できると思っていたのですが体温の差が不同であると入院が長引き、その内に部隊の移動となりましたので、自己退院し、部隊と一緒に行動したい旨院長と軍医に伺いましたら、再発の恐れがあると、また部隊より太田班長も来て駄目だから全快してから退院するようにと念を押されて、部隊と同一行動できず申し訳なく思いました。

昭和十九年一月十日、ようやく待望していた退院ができ再び勇一三〇一部隊第三大隊第三機関銃中隊に編入されました。この第三機関銃中隊はバリ島で警備隊へ合流し、同警備隊に配属され警戒に当たりました。数カ月後移動命令が出て私達退院者だけ出発、四月二十九日、壇崎隊に編入され、部隊追及のためバリ島を出発しました。

四月三十日、ジャカルタ着、五月一日、同港出港、五月四日、昭南港着、同日上陸、シンガポールには約一カ月以上滞在しました。私どもは追及

部隊なので任務はなく命令を待つのでした。六月十日、昭南港を出発、陸路汽車輸送でした。これは貨車に便乗したので暑苦しく日中等は中におられず貨車の屋根に天幕を敷いて体を横に寝ると良い体勢になります。汽車は薪を炊くので火の粉や煙が飛んできませんが車内よりは余程良かったのです。

昭南からマレーシアを通過し、六月十五日、泰国国境通過、六月十七日、泰緬国境を通過しました。泰緬鉄道は日本軍が現地人を使い、輸送に間に合うよう早く完成させたので橋も木橋また谷の橋などは数十メートルの長さもあり目が廻る程、橋下には落下した汽車や貨車が折り重なった無残な姿が見られる有様です。その上を通過するのですから良い気持ちはしません。このような箇所が数多くあるので無事通過できるとホッとします。

この泰緬鉄道は大変苦勞して出来上がったと後日聞きました。泰国は戦場では無く、普段と変わ

りなく国境を越えビルマに入りました。無蓋車の貨車輸送で沿線には住民の姿も見え、日中でも何事もなく走れました。

私共退院兵は武器も無い臨時部隊で、何が起きても対抗できないことを思い心細かったものです。ビルマに入って数日、各駅には日本兵のみで住民の姿はチラホラ見受ける程度でありました。

どこを走っても原野で駅もなく、途中で敵機が一機、線路沿いに低空飛行で機銃掃射しながら飛び去ります。汽車は急停車し、兵隊は飛び降り、数十分様子を見てまた発車します。またビルマは川の多い国で、川幅も広く、渡し舟が無いと何日も滞在し、その内渡れる連絡船を待ちます。乗船、下船、汽車と次々に乗り移ります。戦場跡です。住民もおらず、敵は山の中腹に散らばって煙を上げている姿が見えます。

昭和十九年九月、ここに本隊が居ると聞き下車、同時に原隊復帰、久しぶりに佐藤周泰第二機

関銃中隊に復帰しました。と同時に機関銃の小隊長の当番兵を命ぜられました。弾薬手もやりながら第一線ですので小馬一等を貰い、荷物を積み、小隊長の荷物も積んで行軍、こんどは余分な物は身に付けました。

休憩時は馬の手入れ、水飲ませ、飼付、積荷の積み降し等本人の休む時間がなく出発です。ただ行軍中は馬と一緒に歩けば良く、時々小隊長も乗馬の時もあり、その分私の荷物が多くなります。今度は昇り坂を歩いても歩いても昇り坂で、そのうち着いた所は頂上、ここは北シャン州とか云うことでした。何とこの山の陰は中国だ、ここより第一線だなどと話しているうちに向かいの山に敵兵がうろついている姿が見えた時、急に武者振るいがしました。

私共は青葉の木の下より敵兵が見える低い所を見つけ、木の葉で身を隠す。機関銃は前方の高い所に陣地を構える。「準備よし！」と同時に「敵の飛行機だ」と大声で連絡がありました。敵機は

上空を何回も廻って間もなく、二、三機が私共の上空で爆発する爆弾を落とし、頭上の木の葉が枯木のように全部無くなり、今度は敵から丸見えになりました。

同時に「太田分隊、後方に下がれ」の命令があり、合間を見て山の陰に身を隠す。その後、砲弾が頭上を飛び去って行く。同時に後方に撤退することになったのですが、弾一発撃たずに徒歩で下山する。道路は敵の戦車部隊に占領され、昼間は行軍ができず、敵の目に付かぬよう夕方早く出発、夜通しで行軍する。そして昼間は木陰で待機の繰り返しですが、次々と敵に先廻りされ、我方が部落に着く暇はありませんでした。

時々山中にも少数の部落が見付かる時もあり、その時は食物捜しに休憩する。何日も何日も行軍また行軍、雨の日もあり病人も出る。乗る物は何もしない食物は現地人の家を捜すと何かある。少しを皆で分け合う。

昭和二十年七月十七日、タウジャンの部落に着き、民家で食物捜しをします。夜が明けた時、既に敵軍は日本軍がこの部落に着く事を察知し、戦車で包囲され、敵弾が飛んで来ます。我々は機関銃で対戦する。何人もの負傷者が出る。大きな建物に身を隠し夕方近くになると敵は弾を撃ってきません。

しかし民家は焼けたためお寺に隠れ、そこに負傷者を集めて手当を始めました。そして夕方を待つて全員脱出する。その時は敵兵は遠くへ行った模様で、いざ行軍となったのですが、当番兵の私は少隊長の所在が判明せず離ればなれになり行方不明でした。しかし太田分隊は全員事故もなく無事でした。

その後、本部追及のため夜行軍に移り、大分歩いたと思っても隣部落、気ばかり焦り、敵兵は本道路、我が部隊は山道でした。また昼間行軍中に小部落に着いて大休憩の時、敵の敗残兵の迫撃砲弾で頭部を負傷しましたが休憩中なので即座に手

入れ、手術を受け、九死に一生とはこの事かと思
いました。本当に瞬間的な出来事で、応急処置で
は頭骨には異状無しとのことで安心しました。

同じ場所に居合わせた戦友の二、三人も軽傷で
すみました。その後の行軍は日中は暑いが頭を三
角衿で覆い、後方を行軍することになりました。
そして行軍中の二、三日、傷の手入れもできな
かった時もありました。そのうち頭の中がつくつ
く痛み出しました。戦友に見て貰うと白い物がい
る。よく見てもらうと蛆虫が湧いているとのこと
です。このように手入れ不足もどうにもなりませ
ん。しかし足だけは丈夫なので、何日だったか分
からないが、着いた部落はモールメンでした。

そして当地の陸軍病院に入院となりました。こ
こには患者が相当数おりました。日時は不明でし
たが、入院日は八月七日と判明しました。早速手
当を受けましたら大分化膿しているが骨は異状な
しとのこと。この病院は日本の赤十字病院のよう

で屋根には赤で十字のマークが付いていました。
入院中は爆撃もなく安心でした。数日後入院患者
の誰かが、日本が無条件降伏したので、入院患者
も武器を返納せよとなり、所持していた手榴弾と
帯剣を差し出しました。頭の傷も大分よくなって
来た同九月三十日、退院の命が出され、退院患者
の数十人は泰国に送られました。

十月七日、泰国のナユサワン捕虜収容所に着
き、九州部隊の高射砲隊に編入されました。運が
良いか悪いか鉄道警備を命ぜられ、二十人位で日
夜交替勤務です。泰国は泥棒が多い国で警備は大
変でした。鉄道構内の貨車内の荷物、食糧等倉庫
の品物です。でも暇な時は洗濯、マジャン、花
札、将棋、囲碁等の娯楽で時を過ごしました。捕
虜ながら普通の食事で外地に来て以来の待遇でし
た。

そのうち誰話すともなく内地帰還が近々あるよ
うだと話題になりました。噂が事実となり、昭和

二十一年六月四日、收容所出発の連絡があり、捕虜生活約八カ月、その間鉄道警備や娯楽と忙中閑有りの日々でしたが、内地復帰の命令が出たとなると一日も早くと何事も手に付かずです。それに付けても思うのは、第一線での同隊の方々は、どうなったのか、負傷のため早く帰るのか、原隊との連絡ができないで早く帰ったのか、そんなことを考えながら一足先に皆さんより早く帰して頂きました。

同日收容所出発、六月六日バンコック着、六月八日内地帰還のため乗船しました。野砲兵第二十一連隊と同船でした。

六月十一日、佐世保港に寄港、ここで高射砲隊が下船、別れを告げました。六月十三日、陸軍兵長に昇進、同日浦賀港着上陸、直ちに頭からDDT粉剤を、また着衣も全部消毒、のち新品の軍服に着替え、復員列車で横須賀駅発、各駅で乗り継ぎ、仙台を経由して鹿又駅に到着した時は、生き返りて再び故郷の土を踏んだ足に力が入りました。

家族への連絡もせずの帰宅でしたので驚きと喜びが大きく、隣近所の方々も祝に来てくれました。

こうして健康で帰ることができましたので、戦地での苦労や経験を生かし家業で頑張る覚悟を新たにしました。

昭和二十一年十二月三十日に結婚、二男二女に恵まれ、全員結婚、孫は内外に九人、現在は息子夫婦と孫二人の家族になりました。私達二人は毎日ゲートボールで健康づくりに励み喜寿を過ぎるの老後を、勿体無い位の幸せに恵まれております。

戦後の貧困から今日の立派な国家を復興して、毎日平和な生活を送っていることを振り返る時、祖国日本の土を踏むことのできなかつた戦地で亡くなった戦友と、復員後亡くなった戦友のご冥福を切にお祈り申し上げます。